

## 日本のアイデンティティを見つめ直す

2019 年 8 月  
研究会員代表幹事  
荒川 和彦

### 1. 研究テーマ選定に当たっての問題意識

平成が終わり、令和という新しい時代の幕が開けました。国民の統合の象徴である天皇陛下が交代されたこと、新元号の典拠が従来のような漢籍ではなく我が国最古の歌集であったこと、そして元号という制度自体が今や我が国独自のものであることも相まって、わが国のあり方に思いをはせられた方も多いと思います。

翻って我が国の現状を見渡せば、少子高齢化、財政赤字、アジア外交の緊張、エネルギー戦略、集団的自衛権、憲法改正等、抱える課題は枚挙にいとまがありません。浩志会のメンバーも、それぞれの持ち場でそうした課題への対処に尽力されていることと思います。

これらの問題は、一つ一つバラバラにあるわけではなく、より大きな課題、すなわち日本のあるべき姿の共通理解というものにつながっています。結局、「これからの日本をどうするか」といったレベルで考えない限りは、解決できないのであって、国全体を捉え直すことから出発しなくてはならないように思います。

FT 米国版編集長のジリアン・テット氏は、高度に複雑化した社会に対応する

ため、組織が専門家たちの縦割りの「サイロ」になり、その結果変化に対応できないという逆説を「サイロ・エフェクト」と指摘しています<sup>1</sup>。組織を横断して統合的に考える知が足りないという点は、国全体のレベルについても言えると思います。そして、今を遡ること37年前に浩志会が設立されたのは、まさにこうした組織間の縦割りが日本を戦争に突き進めた（日本側の）主要な原因の一つであり、組織の枠を超えて交流・議論することが重要、という問題意識に基づいたものであり、国のあり方について議論するのは浩志会の設立趣旨そのものであると言えます。

こうした問題意識を踏まえて、2019年度は「日本のアイデンティティを見つめ直す」を研究テーマとして設定したいと思います。言わば日本の「自己分析」から将来の日本を考える、というアプローチです。

筆者自身がこの1年間、前代表から提示された「怒りと世界・日本～その対処と活用」という難しい課題と格闘しつつ研究会員として活動してみて、浩志会のメンバーの魅力、バックグラウンドの多様性、自由闊達な議論ができる雰囲気大変魅力を感じました。「日本のアイデンティティ」をどう考えるかについては、研究会員それぞれの「日本論」があると思います。いよいよ中堅世代にさしかかる我々の社会的責任を踏まえ、浩志会の設立理念に立ち返り、組織の立場を離れて、1年間日本についてじっくりと議論を戦わしてみたいと考えた次第です。

## 2. 「日本のアイデンティティ」の本質とは

研究会員の皆さんは、何に「日本らしさ」を感じるでしょうか。豊かな自然、和の精神、おもてなし、和食、武士道、茶道、温泉、着物、富士山、桜の花、アニメ、勤勉性などなど、文字通り多種多様と思います。そうした「日本らしさ」の根源にあるもの、言わば「日本のアイデンティティの本質」とは何でしょうか。

---

<sup>1</sup> ジリアン・テット「サイロ・エフェクト～高度専門化社会の罟」（文藝春秋、2016年）

「アイデンティティ」という言葉は、心理学用語で「自己同一性」を指しますが、今や日常語として使われています。新明解国語辞典では「自分という存在の独自性についての自覚」と定義しています。また、政治学者ベネディクト・アンダーソンに倣っていえば、アイデンティティは「想像された自己」であり<sup>2</sup>、政治学者サミュエル・ハンチントンの言を借りれば「我々が考える自分の姿であるとともに、そうなりたい姿でもある」といえます<sup>3</sup>。

自分という存在の独自性は、他者との比較があって初めて成り立つものです。「他者」には「過去の自分」も含まれると解釈すれば、「日本のアイデンティティ」を明らかにする上で、諸外国との比較、および、かつての日本との比較という視点が重要でしょう。

### 3. 議論の出発点として：歴史の中の、世界の中の「日本」の立ち位置

そもそも「日本」という国号は、漢字としては「日出るところ」ですが、どこから見て日が昇るのかといえ、それは中国からみて、ということになります。つまり「中国から見て東」という意味です。2000年前、中国人が代数の初歩を解いていた頃、日本はやっと水稻栽培の技術が全国に広まった段階であり、日本人は東アジアの最後進民族でした。

その日本は現在、歴史的に、そして世界的にどのような立ち位置にあるといえるでしょうか。19世紀以降の日本を概観する観点から、議論の出発点として、少し長くなりますが、文化人類学者の船曳建夫教授の指摘を引用したいと思います。

—— 「日本は、明治維新前後から西洋文明の「追随者」として出発し、日清・

---

<sup>2</sup> ベネディクト・アンダーソン「想像の共同体：ナショナリズムの起源と流行」NTT出版、1997年

<sup>3</sup> サミュエル・ハンチントン「分断されるアメリカ～ナショナル・アイデンティティの危機」集英社、2004年

日露の二つの戦争によって成功を収め、西欧強国の「同伴者」、パートナーとなった。しかし、1930年代以降、指導者たちの国際情勢の見誤りによって、日本は国際政治の「孤児」となり、第二次世界大戦の大敗北を招く。それが戦後、アメリカの「養子」となることで、民主主義と資本主義のいわば「いいとこ取り」をし、近代化（西洋化）における第二の成功を収めた。が、それも1990年前後からの国際的勢力関係と資本主義の再構成の中で、「アジアと西洋の間」で、国家政策でも国民的アイデンティティでも不安定な状況にある。」（中略）「孤児が養子として引き取られ、その養い親（アメリカ）から自立の時を迎えて故郷（東アジア）に戻ってみると、初めこそ近代化のトップランナーとしていささかの優位と威光があったが、本家の長男（中国）が威勢を取り戻し、分家の従兄弟（日本）としては、西洋帰りのアドバンテージが日に日に目減りしているのを感じる、といったところであろうか。」（船曳建夫「日本人論」再考」講談社 2010年文庫版あとがき）

船曳教授が指摘する「日本のアイデンティティの不安定化」が始まった1990年前後、すなわち昭和が終わり、平成が始まった時期は、我々浩志会研究会員世代にとっては自己形成期に当たるかと思います。筆者自身、物心ついた頃「経済大国ニッポン」「ジャパンアズナンバーワン」と盛んに言われていたのが、バブル崩壊によって国全体が沈滞したムードに陥っていくというアップダウンを時代の空気として感じてきました。特に今世紀に入ってから、中国が著しい成長を遂げる中で、さらに、足許では米国と中国が貿易問題を巡って対立を深める中で、わが国の立ち位置はますます不安定に、そして舵取りが困難に直面していると言えると思います。

#### 4. キャッチアップとフロントランナー

こうした「日本の立ち位置」を歴史的に形成してきた「日本人の特性」はどういったもののでしょうか。この点に関連して、フランス現代思想史の内田樹教授は、人類学者梅棹忠夫教授の「文明の生態史観」や政治学者丸山眞男教授の論考等を参照しつつ、日本人固有の思考や行動はその「辺境性」によって説明

できるとしてあります。曰く、

——「日本人とは辺境人である。中華思想を受け入れて中国の辺境に自らを位置づけたことから日本の歴史は始まった。常にどこかに『世界の中心』を必要とする辺境の民が日本人である。辺境人としての日本人は、常に『自分たちは遅れている、劣っている』という自覚を持っており、正しさを保証してくれる誰かを外部に求めてしまう。日本人は後発者の立場から効率よく先行の成功例を模倣するときには卓越した能力を発揮するけれども、先行者の立場から他国を領導することが問題になると思考停止に陥るのである。」(内田樹「日本辺境論」新潮社、2009年)

ある問題に対処しようとするときに海外の事例を挙げて、「アメリカ『では』こうやっている」「イギリス『では』こう考えている」と語る「ではの紙」を皮肉った「出羽の守(でわのかみ)」論法は、確かに未だにわが国の随所で見られるものであり、「キャッチアップの精神」が日本人に深く染み込んでいる、という指摘は説得力があると感じます。

しかし、本当に日本は世界をリードすることができない国なのでしょうか。

今や、わが国が直面する課題は、エネルギーや資源の欠乏、環境汚染、温暖化現象、廃棄物処理、少子高齢化、都市の過密化と地方の過疎化、教育問題、長期化するデフレ、財政赤字、農業問題など、世界のどの国も解決したことのない課題、すなわち、人類が初めて経験する問題が多く含まれています。こうした問題は、海外の事例を紐解くことで解決することはできません。どうしても自ら新しい答え=モデルをつくるというマインドを必要とします。

わが国が survive していくために、課題解決の世界的な「先頭集団」から一歩抜け出してフロントランナーになれるかが問われています。この点、例えば公害問題については、わが国は他国に先駆けてこれを克服したという実績を有しています。

個人的な経験になりますが、筆者の出身地に近い千葉県手賀沼では、かつて急速な都市化の影響で生活排水が流入した結果汚濁が進行し、湖沼水質汚濁全国ワースト 1 位という不名誉な記録が続いていたのが、周辺自治体・住民が一体となって下水道の整備などの浄化対策を粘り強く行うことによって水質が大幅に改善し、失われた生物の復活が少しずつ確認されるまでになりました。筆者自身は、日本にはフロントランナーとしての力があると信じていますし、そうした営みに微力ながら貢献していきたいと願っています。皆さんはどのように考えるでしょうか。

## 5. 世界におけるナショナリズムの高まり

2020年東京オリンピック・パラリンピックの開催まであと1年を切りました。日本中が「ガンバレ・ニッポン！」の熱気に包まれることでしょう。国別対抗のオリンピック・パラリンピックは、スポーツとナショナリズムが結びつく機会でもあります。半世紀前の1964年東京オリンピックは戦後の復興と平和国家日本を世界にアピールした高度成長期の輝かしい軌跡として今も記憶されています。

今、スポーツ界では海外にルーツを持つ選手が活躍する風景が当たり前になっています。1月にテニスの大坂なおみ選手が日本人初の世界ランキング1位となり、6月には米プロバスケットボールNBAで八村塁選手が日本で初めてドラフト1巡目指名されました。さらに同月、陸上のサニブラウン・ハキーム選手が100メートルで9秒97の日本新記録を樹立。こうした選手たちの活躍は、訪日、在留とも外国人が過去最高で増え続ける日本社会の映し鏡のようでもあります。

「国家のアイデンティティ」について考える際、昨今の国際情勢におけるナショナリズムの高まりについても考えないわけにはいきません。「アメリカ・ファースト」を掲げるトランプ政権の米国や、自らの主権の回復を掲げてEUからの離脱に突き進むジョンソン政権の英国、移民問題に揺れるヨーロッパ諸国における排外主義の高まり、そして、足許の日韓関係における緊張の高まりにつ

いても、ナショナリズムの問題が深く関わっています。マイノリティ、弱者への視点も忘れてはならないでしょう。

## 6. まとめ

以上、何点かのパースペクティブをお示しましたが、筆者自身、本稿の執筆に当たって文献を調べ始めて、日本論・日本文化論というジャンルで執筆されている書籍が膨大であることに圧倒されました。自国論がこれだけ大量に書かれ・読まれている国は世界の中でも例外的なのかもしれません。それはなぜなのか、ということ自体も論点になり得ると思います。

「地中海世界」を著した歴史学者フェルナン・ブローデルは、その著書「フランスのアイデンティティ」<sup>4</sup>の中で、①空間と歴史、②人間と事物、③国家・文化・社会、④外から見たフランス、と項目を分けて著述しました。こういった分類は研究を進めていく上での有力な方法論であると思います。ブローデルが同書で述べている以下の言葉が筆者の研究テーマ設定に当たっての問題意識を大変端的に表していましたので、その言葉をお借りしたいと思います。

「私が我が国のアイデンティティを観察しようとするのは、明日のフランスを心配し、問い直したいからである。」

時間軸と空間軸、すなわち歴史的な視点と世界の中の日本、という視点をもって、「日本および世界の発展のために」という浩志会の設立趣旨に立ち返って、これから1年間、未来志向の骨太な議論を展開していければと思います。

## 7. 終わりに：研究を進めるに当たっての留意点

さて、最後に、研究会員2年生の方々にはご案内のことも多いかと思えます

---

<sup>4</sup> フェルナン・ブローデル「フランスのアイデンティティ」論創社、2015年





※本稿における意見・考え方は、筆者の個人的見解であり、浩志会及び筆者の所属組織とは無関係であることをお断りいたします。